

國學院大學學術情報リポジトリ

天狗のイメージ変遷： 江戸以後天狗の親和性への考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 童, 碧林 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001554

天狗のイメージ変遷

—— 江戸以後天狗の親和性への考察 ——

The Changes of *Tengu*'s image

— A Research on Human Being's Closeness Towards *Tengu* Since *Edo* —

童 碧 林

要旨

天狗といえば、鼻高で赤ら顔、山伏姿で高下駄を履き、羽団扇を持って空中を自在に飛行するというイメージを思い浮かべる。天狗の歴史は長く、時代に伴って、そのイメージも変遷しつつある。本稿は天狗のイメージ変遷を特に民話を事例として、考察してみる。江戸以後、天狗は畏怖された対象ではなく、かえって親しいイメージが定着し、主流を占めていると思われる。そこで、民話に基づいて、庶民に恩恵を与えた話、友達としての天狗の話や山神としての天狗の話、また、天狗の愛嬌などの民話から天狗の親和性を検討する。

更に、そのイメージ変遷の原因について簡単に分析してみる。これに対して、小松和彦氏は、「中世までの妖怪とは、人間にとってただひたすらに恐怖の対象、畏怖の対象であった。ところが、江戸時代になると、それとはまったく異なる態度が見られるようになる。妖怪を娯楽として楽しむという態度である。その根底には、日本人の自然観、神霊観の変容があった」⁽¹⁾と述べた。従って、本稿では、この「江戸以来の妖怪の娯楽化」と「信仰の商品化」というイメージ変遷の原因を探ってみる。

摘要

提到“天狗”，其形象不外乎是具有高高的红鼻子和红脸，手持团扇，穿着修行僧服，背后长着双翼。在日本，天狗拥有悠久的历史，形象也随着时代的变迁而不断发生变化。本稿以天狗的形象变迁为中心加以探讨。通过对天狗

キーワード：天狗 イメージ 親和 江戸 原因

关键词：天狗 形象 亲和 江戸 原因

(1) 小松和彦『日本妖怪学大全』小学館 2003年 P189

の民間故事の考察，得出结论：自江戸以后，天狗不再被认为是可怕的对象，反之变得亲切可爱。甚至今日，天狗的亲和形象依然占据主流。其中，主要从天狗予人恩惠，天狗为人守护，天狗被戏耍愚弄等事例中对这一可爱亲近形象予以探讨。

最后，则是简要分析天狗形象变化的原因。对此，小松和彦提出：“直到中世，妖怪一直是人们畏惧害怕的对象。然而，江戸以来，这一态度发生了变化，妖怪的娱乐化现象渐显，妖怪开始成为人们娱乐的一种对象。根本而言，受到日本人的自然观和神灵观变化的影响。”鉴于此，本稿主要对江戸以来妖怪的娱乐化和信仰的商品化这一原因进行分析讨论。

1 はじめに

天狗が初めて日本に出現したのは『日本書紀』の舒明天皇九年（637）2月23日戊寅の記事であり、そこには「大きな星東より西に流る。便ち音有て、雷に似たり。時の人の曰く、流星の音なりといふ。亦是曰く、地雷なりといふ。反是に、僧旻法師⁽²⁾が曰く、流星に非ず。是天狗なり。其の吠ゆる声雷に似たらくのみ」⁽³⁾と記される。中国では、天体現象である流星は、天文占いの解釈によると妖怪の天狗と解釈されていた。つまり、流星イコール天狗である。ただし、僧旻の解釈は、流星と天狗を切り離す。これは、異文化を導入するときどうしても生じる変容の小さな一例であろう。ここに、天狗が日本の妖怪としていきっていく素地が作られたといえる。

その後、平安中期の頃、天狗は流星から天狗こだま、あるいはすだまという姿を見せない山の妖精に変身していった。また、『今昔物語集』における天狗譚では、天狗は先の流星、形のない山の木霊、すだまなどから完全に脱皮した人間臭い姿となり、仏教に障害となり、人間界に災禍をもたらす魔怪というイメージが強い⁽⁴⁾。さらに、中世になると、天狗は山岳信仰や修験道と関連して、天狗山伏の悪戯などが注目される。こうして見ると、江戸以前の天狗の話のほとんどは、人々に恐怖や畏怖感を与える存在であった。しかし、江戸以後、天狗は次第に人間の生活に浸透し、人間との交渉を重ねるに

(2) 僧旻：(?-653) 古代の学僧。608 年遣隋小野妹子に従って渡隋、632 年帰国。645 年、高向玄理とともに国博士となり、新政府に重きをなした。

(3) 坂本太郎『日本古典文学大系』岩波書店 1965 年 P232

(4) 『日本古典文学大系・今昔物語集』巻二十「天狗十話」岩波書店 1983 年

したがって、人間にとって恐ろしい対象ではなく、かえって親しい存在となる。本稿は民話を庶民に恩恵を与えた話、天狗の愛嬌の話、友達としての天狗の話や山神としての天狗の話という四種類の事例から、天狗の親和性を論証する。そして、その変遷の原因を検討してみたい。

2 天狗の親和性への考察

民俗学者柳田国男は「天狗は山の神の化身である」と述べている。従って、山の神＝天狗＝山伏ということが認められる。これは、神仏混淆の産物である山岳信仰と関係すると考えられる。

特に、中世後半に入ると、修験道の影響を受けて、天狗の一般的なイメージは山伏姿となる。江戸時代に入ると、鼻高で赤ら顔、山伏姿で高下駄を履き、羽団扇を持って空中を自在に飛行するという天狗の姿が定着し、今日の天狗のイメージと近い姿となる。これは、「鼻高天狗」と呼ばれるものである。こうした場合、神道や修験道からの影響も受けて、天狗に大力を授かったとか、山の神として祀られたなどの話も伝えられている。また、近世以来の妖怪文化の娯楽化に従って、天狗の零落したイメージも見ることが出来る。天狗は人間によって容易に欺かれてしまう愚者となっている話もこうした例の一つと考えることができる。そのほか、天狗と庶民の術比べのような話は、庶民が天狗に親しみを持って接している証拠と見なされる。

このようにして、次第に鼻高天狗の親しいイメージが形成され、民間へ浸透していった。以下には天狗の親和性について考察を加える。

(1) 天狗からの恩恵

〈事例1〉天狗のお守り

加賀藩の老臣本多氏の家老篠井雅楽助の若衆が、天狗化生の祈念をしてついに念願かない、ある日煙のごとくに姿を消した。その後主人雅楽助の夢枕に現われて、奉公中のお礼として馬の鞍とお守りを差し出した。このお守りは天狗にさらわれたとき携えて本人を探せば、必ず発見できるという霊験あるものだが、効能の期限が七代限りだという。覚えてみれば鞍は庭の楓の枝に掛かり、お守りは枕辺にあった。それからは金沢市中で子供を天狗にさらわれたものは、このお守りを請けて探すと必ず子供を見つけることができた

という話である。(5)

岩手県上閉伊郡土淵村飯豊の今淵家で、仏壇に灯明をあげたままみな畑に出てしまったあとで、灯明の火が他に燃え移ったが、幸い大事にはいतरなかった。仏壇の同じ棚の中に掛けてあった古峰様の軸物だけはそっくりそのまま残っていて、火を消してくれたのもこのお札のおかげだという。古峰様は天狗を祀るという。(6)

〈事例 2〉天狗に大力を授かった話

埼玉県入間郡。高麗駅の前に聳える日和田山は低い丘陵であるが、土地ではなかなか有名な信仰の山で、昔は山頂で雨乞い祭などが行われていた。高麗村の清流からこの山に登ると、途中に天狗さまを祀った金毘羅神社がある。日和田山の近くの中野部落に、荒井末太郎さんという弱虫男がいた。何をしても一人前のことが出来ず人にはいつも馬鹿にされるので、どうかして強くなりたいと日和田山の天狗に願をかけ毎夜金毘羅参りをいたした。中野から日和田山に行くには途中イボ石の峠という所を通るが、九日目の夜、弱虫男がここを通ると、峠の上のモミソの老木にたくさんの提灯が吊されていた。これは天狗の提灯で、男の勇気を天狗が試したわけである。弱虫男は恐ろしい我慢してそこを過ぎ、やっと金毘羅神社にきて拜んでおると、今度はお堂がグラグラと揺れ出した。それでもじっと我慢していると、ついに天狗は感心してその男に大力を授けた。(7)

〈事例 3〉天狗の弟子

岡山県板倉伊賀守の旧藩士で、当時備中の高梁に住む岡山県士族武野武平は、かねてから金毘羅の信者であったが、ある日、女房のおよしに、「今日は信仰する大権現の大祭日であるから、これからちょっと讃岐へ行ってくるが留守番を頼むぞ」と言い捨てたまま、家を出たが、一月たっても二月たっても音沙汰がない。女房も心配でたまらず、人を頼んで讃岐へ探しにやったが、一向行方が知れない。気が狂って死んだのであろうと、良人が家を出た日を命日として、仏事を営んでいた。すると、十年たってもちょうど命日にあ

(5) 岩井宏實『暮しの中の妖怪たち』文化出版局 1986年 P30

(6) 柳田国男『遠野物語』角川書店 1955年

(7) 松谷みよ子『河童・天狗・神かくし』立風書房 1985年 P293

たる日のこと、女房およしが茶飯をたき、親類の人たちを呼んで、心ばかりの法事をしているところへ、のっそりと入ってきたのは死んだとばかり思っていた良人の武平であった。武平は、垢のついた行衣の上に、笈を負い兜巾をあて、草履をはき、金剛杖をついているのであった。驚く女房たちを押ししずめながら、武平は悠然と座敷に上り、まず上座に直ると、「わしは先年讃岐への象頭山へ参詣すると、大権現の有難い神託を蒙り、そのままお山に止まり、名を雄善と賜って、六根清浄の行者となっていたが、その後修行の功が積み、天狗の仲間入りを仰せつけられ、あらゆる難病を根治する方法を授かったので、人助けのため、さきほど下山し、一時間ほどでここまで飛んできたのである。…この噂がいつか評判になると、難病の者たちが治してもらいにやって来たが、雄善は一々その足で病人を踏みつけるという荒療法に難病を根治する。とにかく、江戸時代からも、明治になっても、こうした天狗の弟子の話がある。⁽⁸⁾

〈事例 4〉天狗のお手伝い

千葉県木更津市。馬込のクナイドンちゅう家に、ちょっとたりねえおじいさんがいた。この人に米つかせたり麦つかせたりしていた。そいである日家の中で聞いてたら、二人でかけ合ってる声がする。不思議に思っていると、天狗がおじいさんの手伝いにきてたって。⁽⁹⁾

〈事例 5〉天狗から授かった秘伝

この話は天狗の神隠しとは異なり、お守りを授けて恩法を施すという話である。石川県松任市成町の円八というものが、ある夜天狗に攫われたが、数年後に突然と帰ってきた。そして天狗の秘伝だというアンコロ餅を製造して繁盛し、子孫相伝して今日におよぶという。こうした話も各地にずいぶん伝えられるが、このほかに天狗に剣術を学んだとか、大力を与えられたとか、超能力を授けられたとかの話も多い。⁽¹⁰⁾

石川県。祖母が処女の頃小立野の馬坂に天狗の灸とて恐しげな老爺が居た。若年の頃天狗に伴れ行かれ点灸の技授けられたとかいうので有名であつ

(8) 松谷みよ子『河童・天狗・神かくし』立風書房 1985年 P306-307

(9) 松谷みよ子『河童・天狗・神かくし』立風書房 1985年 P283

(10) <西日本編> 知切光歳『図聚 天狗列伝』三樹書房 2003年 P221

たと申す。⁽¹¹⁾

これらの話から見ると、天狗は人々に危害を加えたり怖がらせたりするイメージより、むしろ人を手伝ったり、庶民を守ったり、何かの恩恵を授かったり、恩法を施すなど親しみをもったものとして親しいイメージが拡大しつつあると考える。これも、天狗と人間の交流の深まったことを物語る。〈事例 2〉の話では、天狗が男の勇気を試した後、その男に大力を授けたのである。〈事例 3〉では、天狗の弟子が難病を根治する方法を授かったり、人々を助けに来たりするようなことがよくあるとある。また、〈事例 4〉や〈事例 5〉には、天狗がお年寄りを手伝ったり、秘伝や恩法を与えたりする話が語られる。ここから見ると、天狗が、庶民との交渉を重ねるにしたがって、庶民に親しまれる存在へと変わってゆくことが理解されよう。

(2) 天狗の愛嬌

ところで、天狗はまた愛嬌のある、ときにとんな存在として人々の間に語り伝えられている。それは笑話のなかに登場し、人間によって容易に欺かれてしまう愚者となっている。博奕を打って負けたり、天眼鏡や竹筒・穴開錢などによって、江戸・大阪・京などが見えると騙されて、隠れ蓑、笠を取られてしまったり、鼻の高くなる扇や小槌などの呪具を騙し取られてしまう話がある。これらは天狗の零落した姿ともみることができる。またそのために、人間との親しみが生まれたのであった。

〈事例 6〉隠れ蓑・笠型の天狗の笑話

これは宮城県松島町で採集された隠れ蓑・笠型の笑話である。悪戯小僧が竹筒で江戸が見えるといっていると天狗が来る。隠れ笠・羽衣蓑ととりかえ、(小僧は)それを着て逃げる。天狗は騙され、途中で(小僧と)会う。小僧は茨でろ、天狗は餡子餅出ろという。小僧は餅を食い、茨に火をつけ天狗を焼くが、笠も蓑もやける。(小僧は)灰を鉢につけ菓子を盗み、酒を飲んでいてこぼれ臍が出る。⁽¹²⁾

(11) 松谷みよ子『河童・天狗・神かくし』立風書房 1985 年 P294

(12) 関敬吾『日本昔話集成』角川書店 1957 年

仙北郡角館町。男がお伊勢堂へ遊びに行くと、杉の木の上に天狗がいる。男は穴開き銭を目にかざし、「天が見える」と騒ぐと、天狗が降りてきて、「それを譲れ」と言う。男は天狗の嫌いなものは藪だと聞き出し、「自分の嫌いなものは砂糖餅だ」と言う。そのあとで、「鬼ごっこをして自分をつかまえたら穴開き銭をやる」と言う。男はつかまりそうになると藪に逃げるので、天狗が腹をたてて砂糖餅を投げると、うまそうに食べてみせる。天狗が「ほしいものをやるから穴あき銭をくれ」と言うので、男は天狗の隠れ蓑と交換する。男がその蓑で悪事をはたらくので、嫁が燃やしてしまう。⁽¹³⁾

仙北郡南外村。若者が銭の穴に目をつけ、「天狗見える」と言うと天狗が出てきて、「隠れ蓑を着て、隠れ笠をかぶっているのに、本当に見えるか」と言うので、「この宝物で見える」と言って、隠れ蓑笠と交換する。若者は蓑笠を着て物盗りをして歩くが、いろりの火で蓑笠を燃してしまったので、その灰をつけて酒を盗み、酔っ払って寝る。翌朝酒屋の番頭に男の者を茸だと思われて火箸でつかまれ、ひどい目にあって家に帰る。天狗が怒って、「蓑笠を返せ」と責め、「お前が一番嫌いなものを言え」と言う。若者が「砂糖餅だ」と言うと、天狗は重箱に砂糖餅をいっぱい入れて若者にぶつけて帰る。若者はそれを拾って、腹いっぱい食べた。⁽¹⁴⁾

〈事例 7〉天狗からうちわを取った話

怠け者の息子が家屋敷をなくして、花札を一枚ふところにして山に登り、花札を目に当てては、「娘が見える、江戸が見える、津軽が見える」と言っていると、天狗が出てきて何でも願いのかなううちわ〔あとではうちわとなっている〕と交換に花札を借りる。息子が「何が一番こわいか」と聞くと、天狗は「サイカチバラが一番こわい」と言う。天狗が同じことを聞くと、息子は「アンコモチが一番こわい」と言う。天狗は花札を目に当てても何も見えないので、だまされたと怒るが、息子が扇の力でサイカチバラの中に隠れたので近づくことができない。天狗があんこ餅を投げつけると、息子は腹いっぱいになるので、あきれて帰ってしまう。息子が町へ出て、下女を連れて美しい娘を見、扇であおいで鼻を高くすると、娘の家では医者やはり師を

(13) 稲田浩二 小澤俊夫 『日本昔話通観』 株式会社同朋舎出版 1982 年 P554-555

(14) 稲田浩二 小澤俊夫 『日本昔話通観』 株式会社同朋舎出版 1982 年 P556

頼むが治らない。そこへ息子が出かけていって、何日もかけて少しずつ鼻を低くしては金をもらい、ごちそうになる。息子は金持ちの娘の鼻を高くしたりふしぎな病気にしたりして金をもうけ、りっぱな家屋敷を買ってよい身分になる。⁽¹⁵⁾

このような類の隠れ蓑笠の笑話は、天狗を騙した人間を中心としてその失敗談に主要な視点がおかれているものであるが、そこに登場した天狗はほとんど博徒との勝負に負けたり、天眼鏡・竹筒・穴開錢などによって江戸・大阪などが見えると騙されて隠れ蓑・笠を交換してしまう存在である。特に、〈事例 7〉の鼻高扇型の笑話では鼻の高くなる扇などの呪物を騙し取られてしまう存在でしかない。こうした天狗に対するイメージは、笑話が人間中心に語られるという性格からして当然のことであり、天狗の零落した姿としてみることもできる。つまり、人間から畏怖された対象である天狗が、人間よりも劣った存在となってしまった。言い換えれば、天狗は人間によって容易にいたずらされてしまう愚者として存在する。ここに、天狗の恐ろしいイメージが零落し、逆に親しいイメージが民衆の中には浸透してくると見られる。

(3) 友達としての天狗

また、以下には、天狗と付き合うなどの話を例として、例えば、天狗が庶民の家に留まること、天狗と庶民の術比べ、また庶民が天狗から珍しいものをもらうなどの話を通じて、天狗と人間との付き合いの一面を示し、その親しいイメージが見えると思われる。

〈事例 8〉酒好きな天狗の話

遠野の町の某という家には、天狗の衣を伝えている。昔この家の主人と懇意にしていた清六天狗というものの著用であったという。清六天狗は花巻あたりの人であったそうで、酒が好きで、常に小さな瓢箪を持ちあるき、酒代によくさびた小銭をもって払っていたという。⁽¹⁶⁾

それに、「岩手県三本木原の農夫の子千三郎が羽黒の天狗に化って、兄の寡婦とその子を扶けたという、幾年間にもわたる分身の話などもある。大太

(15) 稲田浩二 小澤俊夫『日本昔話通観』株式会社同朋舎出版 1982年 P557

(16) この話は松谷みよ子氏の『現代民話考Ⅰ 河童・天狗・神かくし』を参考としている。そして、松谷みよ子氏は柳田国男氏の『遠野物語拾遺』の出典を参考する。

法師の変型らしい秋田の三吉天狗が相撲好きで、ある年江戸の関取に相撲をいどんで投げ飛ばされ、本気になって怒ったとか」⁽¹⁷⁾という話も知切光歳氏は『図聚・天狗列伝』の中で記している。

〈事例 9〉天狗と役者の話

徳島県海部郡。このあたりには天狗が必ず出る、お祭りには。鼻の高い天狗、それも八尺豊かな。ほいで人をパクッと飲む。あの天狗は、伸縮自在で大きにもなり、こんもうにもなるのが特徴。

ある役者が山を通りよった。ほいで行ったらほこらがある。ほの神さんの前にひと休みしておった。ほしたらここい、ひょっと見てみると、大きなげたがある。げたの高さが、自分の体の半ばぐらいまである。ひょっと見て、杉の木が生えとんのかと見てみたら、天狗や。

「よう来た。お腹すいとるところやった。おまえ食べたい」

「ちょっと待ってくれ。術比べせんか。」

ほんで結局、芝居の役者はいろんな役をやるわけ。女形をやり、老人をやり。ところが、

「おまはん、こんだけわしが七変化、雪之丞変化⁽¹⁸⁾ やったわけ。そういうにおまえもやってみたい」

「ようし、まずこの杉の高さぐらいになってやる」

いうて、ずうーと、

「天狗の鼻。鼻高くなれ、天狗の鼻。鼻高くなれ」

いうとって、たぁーと大きくなった。

「なるほどりっぱなもんや。しかしただ大きゅうなるだけやったらやな、杉の木でさえ大きゅうなる。これ肥やしやったら、なんぼでも大きゅうなる。おまはんとおんなしぐらいの大きさやないか。ほんなんやったら、小さくなってみい」

「ようし、小さくなってやる」

「天狗の鼻小さくなれ、天狗の鼻小さくなれ」

いうたら、小さく小さくなって、

「ほんならわしの手の上に乗ってみい」

(17) 知切光歳『図聚・天狗列伝＜西日本編＞』三樹書房 2003 年

(18) 三上於菟吉の昭和十年完結の長編大衆小説。映画・演劇にもなる。

いうたら手の上にぼっと乗った。

「もっと小さくなれ」

いうたら、また一寸くらいになった。⁽¹⁹⁾

この話は、天狗と役者との術比べや交流を通して、やはり天狗は親しみをもったものとして見られるということが考えられる。

〈事例 10〉天狗の生き針

山形県。夜、男が父に縛られた。この頃、天狗が来た。「何だ野郎、こがえなどこで何した」ていうたら、

「おれ、大した悪れごどしねげんど、おどつつあ縛ったもの」

「かわいそうだ、おれ、解いでやっから」

「お天狗さま、お天狗さま、かぶっていだな、何よ」て聞いたば、

「これは聴耳の頭巾ていうもんだ」て教えたと。と、

「この頭巾かぶっじど、烏が何ていうてだも、烏が何て鳴いてるも、みんなわかる。烏が『あした、あの家の人が死ね』とか、こうだどかて鳴いてるの、みなわかる」ていうたど。

「ううん、おれに貸してみねか」ていうたって。

「あまりええごで。かぶってみろ」て、かぶらせて貸したど。それから針も。

「こいつあ生き針で、死んだりけがしたりしたどこさ、チュクッと刺すど、死んだ人も生き返るし、けがした人だど、じき治るもんだ」

「ほんじゃ、ここんどこさ置ிட்டな、何だ」

「これは羽根だ」

「羽根、なじょして飛ぶごんだ」ていうたば、

「コラコラ、コラコラていうど、ずうっと飛んで行く」

「降ちっどきは」

「オツツェンがツェンていうど降ちる」

「んじゃ、その羽根、貸してみろ」

て、男は、羽根も針もみな天狗から借りて、飛んでしまった。

...

そして、その聴耳の頭巾からある村の娘が死んだということを聞こえた。男は、その針を娘の片腕に刺してみた。ほしたればピクピクで、またこっち

(19) 稲田浩二編『日本の民話・10 四国』ぎょうせい株式会社 1995 年 P198-201

の腕も刺したらピクピク、ピクピク動いた。そして構わず見っただら、「苦しい」なて、生き返った。⁽²⁰⁾

「こうした天狗と里人との交流譚に見る天狗がはなはだ人懐っこく、純朴で血なまぐさい悪戯がほとんど見られないのは、庶民が天狗に親しみを持って接している証左と見たい」⁽²¹⁾と知切光歳氏は述べた。〈事例 8〉の話では、酒好きな天狗が庶民の家に留まって、常に瓢箪を持ち歩き、小銭をもって酒代を払う姿が見られる。〈事例 9〉には、天狗と役者の術比べのような面白い話が述べられる。〈事例 10〉では、天狗が羽根や生き針のような貴重なものを庶民に与えて、人の命を救った。つまり、これらの天狗と庶民との交流譚を見ることから、江戸時代以来天狗の親しいイメージが主流を占めたということが考えられる。

(4) 山神としての天狗

今でも、日本全国に広く分布する庶民対象としての天狗は、神として祀られるということが少なくない。前にも述べた通り、江戸以来、天狗が怖く恐ろしい存在ではなく、通俗的な信仰の対象へと変わって、民衆の霊の中にも親しく、守られるものというイメージは浸透しつつある。

まず、天狗を山の神と同一視し、祀られる存在であるということから見てゆきたい。

〈事例 11〉天狗様の祭り

埼玉県両神村小沢口では大山祇神社を祀っており、これを通称「お天狗様」と呼び、かつては四月五日（現四月第一日曜日）に「お天狗様の祭り」が行われている。戦前まではこの日に丸太を組み合わせて櫓をつくり、歌や踊りなどが行われたと伝え、さらに村の南西の端に祀られている「お諏訪様」から大山祇神社までの道の両脇には行灯を灯し、それには子供たちがいろいろのトバエ（鳥羽絵）を書いたという。（『りょうがみ双書 2 祭りと芸能』）。

また同じ秩父郡の荒川村では十二月十五日に子供たちによる火祭りが行われているが、これをテンゴウ祭り（天狗祭り）と呼んでいる。そして、十

(20) 武田正編『日本の民話・3 東北』ぎょうせい株式会社 1995 年 P211-215

(21) 知切光歳『図聚・天狗列伝<西日本編>』三樹書房 2003 年 P245

一月下旬頃から小屋作りを行い、祭りの日には小屋のなかで楽しんだ後に火を付けて焼くという。⁽²²⁾（『荒川村誌』）このほか、正月十五日に小豆飯・酒を屋根の上に供えて天狗を祀る地方もあり、ゴヘイモチをグヒンモチと呼んで、山の神である天狗に供える地方もある。こうした習俗そのものは、後に天狗信仰の普及によって、天狗祭りと改されるようになったものである。

次に、天狗は火事知らせ・火伏の霊験があると考えられ、人々に親しまれる事例を挙げながら、見ることにする。

〈事例 12〉火伏の神としての天狗の話

岩手県上閉伊郡土淵村字飯豊の今淵某の家では、七、八年前の春、桜の花の枝を採ってきて、四合瓶の空いたのに挿して仏壇に供え、燈明を上げたまま皆畑に出て、家には子供一人いなかった。しばらくしてふと家の方を見ると、内なら煙が濛々と出ている。これは大変と急いで畑から駆け戻って、軒の近くへ来ると少し煙が鎮まった様子である。内に入ってみれば火元は仏壇であった。燈明の火が走って位牌や敷板まで焼け焦げ、桜の花などはからからになっていたが、同じ狭い棚の中に掛けてある古峰原の御軸物だけは、そっくりとして縁さえ焼け損じていなかった。火を消してくだされたのもこの御札であろうと言って、今更のごとくありがたがっていた。⁽²³⁾

〈事例 13〉アンバ天狗の祭りの話

栃木県では、アンバ天狗の祭りは、毎年三月の第一土曜日と日曜日に行われる。大杉神社の神輿を載せた神輿は、地区の鎮守である日枝神社を出発すると、猿田彦に導かれて集落内を練り歩く。神輿の後にはお囃子が続き、祭りを盛り上げる。行列の中の天狗様は家を回り、悪魔祓いと春の祭りを行う。天狗は家の中で悪魔を祓う際、「アンバさま大杉大明神、悪魔祓ってヨイのヨイのヨイ」と唱える。⁽²⁴⁾

この「アンバ大杉踊り」が、江戸以後、大流行し、江戸市中にも飛び移った。庶民の中では、アンバさまは天狗の姿で、恐ろしい悪魔ではなく、かえって恐ろしい悪魔を退散させるというイメージが強いのであった。民衆は、

(22) 宮本袈裟雄『天狗と修験者：山岳者とその周辺』人文書院 1989年 P41

(23) 柳田国男『遠野拾遺物語』角川書店 1955年

(24) 畑中章宏『災害と妖怪 柳田国男と歩く日本の天変地異』亜紀書房 2012年 P82-86

天狗面を神社から借り受け、祈祷するという習俗が広がった。その祈祷に際しては、「アンバ大杉囃子」の歌と踊りを伴うという儀式も各地に広まった。

〈事例 14〉海難除けの天狗の話

大杉神社に伝わる江戸末期の「難船救済図奉納額」には、嵐によって船から投げ出された庶民を、大杉大明神の化身をした天狗が救助しているところが描かれている。大杉神社の天狗は、このように船の航行安全の神として水運関係者に受け入れられていった。それに、『大杉神社大明神縁起録』には、大杉大明神を化身して、天狗が何度も難船の危機を救ったことが記載されている。⁽²⁵⁾

こうして見ると、江戸末期から、海難除けのアンバさまという習俗が広がっていることがわかる。海難除けのご利益を与える存在として信仰され、天狗は庶民に親しまれてきた。

以上からの話から見ると、〈事例 11〉の天狗は山神として祀られるが、天狗信仰の普及によって、天狗祭りと呼ばれるようになった。こういう天狗祭りは、今でも庶民信仰として行われる。〈事例 12〉の話では、天狗が火事知らせや火伏の霊験があると認められ、天狗の御札によって守られたのである。〈事例 13〉のアンバ天狗の祭りの際、庶民は恐ろしい悪魔を退散させるという祈りのために、神社から天狗面を借り受ける。また、〈事例 14〉の天狗は船から投げ出された人を救助するのである。このように、これらの話で語られる天狗のイメージから見ると、江戸時期の天狗は、御利益を求める通俗的な信仰の対象である。つまり、天狗は怖く恐ろしい存在から、御利益を求める通俗的な信仰の対象へと変化し、民衆の魂の中に浸透してしていったのである。

3 変遷の原因——近世における妖怪文化の娯楽化

江戸時代には、商業が栄え、遊蕩的気分の横溢した文芸、美術、演劇などが、町人の手によって開花しはじめ、町人文化が主流になった。それに、畑中章宏氏は、「江戸時代になって、世の中には平和になるが、火事や疫病な

(25) 畑中章宏『災害と妖怪 柳田国男と歩く日本の天変地異』亜紀書房 2012 年 P93-94

どの災難が次々と起こった。民衆にとって、天狗の仕業からの恐ろしさより、むしろ火事や疫病などの現実世界の災厄は、もっと畏怖されていたのである」⁽²⁶⁾と述べている。

また、妖怪文化の娯楽化という気風に乗って、前に述べた天狗の愛嬌や天狗との交流譚などを例として、天狗は人々の中で、さらに親しみを覚えられる。これは、天狗は信仰の対象から娯楽の対象へと大きく変化したためであると考えられる。この点について、「江戸以来の妖怪文化の娯楽化」とは、「日本の妖怪文化は江戸時代中期に大きな変貌を遂げている。それまでは、妖怪は人知が及ばない不思議な現象や存在への畏怖や不安、恐怖から生み出されてきた。ところが、江戸時代の都市民たちは、合理的思考の発達とともに、その多くが架空の存在であることに気づき、妖怪を娯楽の対象として扱い始めた」⁽²⁷⁾と小松和彦氏が解釈した。

具体的に妖怪文化の娯楽化の過程は次の通りである。まず、江戸時代には、妖怪を題材とした絵双六、カルタ、おもちゃ絵、凧、人形などの「妖怪玩具」が製作され、販売されていた。例えば、安政五年に江戸で板行された「百種怪談妖物双六」である。妖怪を題材にした絵双六は、少なくとも享保年間までさかのぼることは確実であり、「妖怪玩具」の中でも早い時期から製作されていたものの一つである。そのほか、「妖怪カルタ」や「おもちゃ絵」や凧などの中にも、妖怪の姿をかたどったものがしばしばあった。このように、江戸時代には多くの「妖怪娯楽」が存在していたが、これら「妖怪娯楽」の特徴として、妖怪は、人々に笑いや遊びの対象であることが見られる。

また、実際、18世紀後半には、もう一つ重要な転換が神霊や妖怪の世界に起こっている。それは、「信仰の商品化」である。湯浅隆は、十八世紀後半、特に安永期以降の江戸の開帳は、「流行るものから流行らせるものへ」と転換していったと述べている。本来宗教的行事であるはずの開帳は、さまざまなメディアを通じて宣伝され、さらに飾り物や見世物の興行など娯楽の要素を付加することによって、人々の関心を集めようとしていた。いわば、信仰は一種の「商品」として、人の手によってプロデュースされるものとなっていたのである。

このような「信仰の商品化」によって、あらゆるものが商品化され、消費

(26) 畑中章宏 『災害と妖怪 柳田国男と歩く日本の天変地異』 亜紀書房 2012年 P86

(27) 小松和彦 『日本妖怪学大全』 小学館 2003年 P88-89

されるようになっていった。18 世紀後半の都市では、水売り、楊枝売りなど、実にさまざまな物売りが町にあふれており、また、あらゆることを金で解決しようとする風潮が広まっていた。こうした中で、妖怪もまた商品化され、人々の娯楽の題材として消費されていったのである。

まとめると、江戸時代になると、天狗は人を誑かし、災をもたらし、怖く恐ろしい存在から、御利益を求める通俗的な信仰の対象へと変化し、また天狗との交流譚を通じて、天狗は、親しみのあるものであるという認識も広まっていた。その後、妖怪文化の娯楽化に伴って、天狗は、遊びのキャラクターともなり、身近で親しみのある存在となった。

以上から見ると、妖怪たちの世界の「近代化」は、江戸時代から始まったのである。そして、現代の「妖怪ブーム」は、その延長線上にある現象なのである。言い換えれば、天狗は、妖怪の一種として、江戸以来、その親しいイメージが定着しつつある。今でも、天狗といえば、“とても可愛い”という印象が主流を占めている。

4 結語

以上で民話を考察してみると、江戸以後、民衆の間では、天狗は恐ろしいイメージが弱く、むしろ親しい存在となることが分かる。特に、現代に入って、天狗などの妖怪グッズはとても人気があるそうである。民衆にとって、天狗は、「全然怖くない、かえって可愛い」というイメージが主流を占めた。江戸時代には、商業が栄え、遊蕩的気分の横溢した文芸、美術、演劇などが、町人の手によって開花しはじめ、町人文化が主流になった。また、妖怪文化の娯楽化と合理的思考の発達とともに、江戸時代の人たちは、妖怪を娯楽の対象として扱い始めた。さらに、世の中は平和になるが、火事や疫病などの災難が次々と起こった。民衆にとって、天狗の仕業からの恐ろしさより、むしろ火事や疫病などの現実世界の災厄の方が畏れられるようになったと考えられる。

すなわち、江戸時代になると、天狗も人を誑かし、災をもたらし、怖く恐ろしい存在であった天狗は、江戸時代を経て、御利益を求める通俗的な信仰の対象へと変化し、また娯楽文化のキャラクターともなり、身近で親しみのある存在となり得たといえよう。

参考文献

一、著作

- [1] 関敬吾. 日本昔話集成[M]. 東京：角川書店, 1957.
- [2] 小学館. 日本古典文学大系 [M]. 東京：岩波書店, 1965.
- [3] 知切光歳. 天狗考・上巻 [M]. 東京：濤書房, 1973.
- [4] 宮本袈裟雄. 天狗と修験者：山岳信仰とその周辺[M]. 東京：人文書院, 1989.
- [5] 松谷みよ子. 河童・天狗・神かくし [M]. 東京：立風書房, 1985.
- [6] 小松和彦. 妖怪学新考－妖怪からみる日本人の心[M]. 東京：小学館, 1994.
- [7] 柳田国男. 柳田国男全集 20 妖怪談義[M]. 東京：筑摩書房, 1999.
- [8] 知切光歳. 図聚・天狗列伝[M]. 東京：三樹書房, 2003.
- [9] 小松和彦. 日本妖怪学大全[M]. 東京：小学館, 2003.
- [10] 杉原たく哉. 天狗はどこから来たか[M] 東京：大修館書店, 2007.
- [11] 畑中章宏. 災害と妖怪 柳田国男と歩く日本の天変地異[M]. 東京：亜紀書房, 2012.
- [12] 岩井宏實. 暮らしの中の妖怪たち[M]. 東京：慶友社, 2012.
- [13] 柳田国男. 遠野物語[M]. 東京：新潮社, 1973.
- [14] 稲田浩二, 小澤俊夫. 日本昔話通観[M]. 東京：株式会社同朋舎出版, 1982.
- [15] 稲田浩二. 日本の民話・10 四国[M]. 東京：ぎょうせい株式会社, 1995.
- [16] 武田正. 日本の民話・3 東北[M]. 東京：ぎょうせい株式会社, 1995.

二、論文

- [1] 勝俣隆. 天狗の古典文学における図像上の変化に関する一考察：烏天狗から鼻高天狗へ[J]. 長崎大学教育学部紀要第七十一号, 2005.
- [2] 伊藤信博. 天狗のイメージ生成について—十二世紀後半までを中心に[J]. 言語文化論集第 29 期, 2007.
- [3] 小松和彦. 日本文化中的妖怪文化[J]. 日本研究第 4 期, 2011.

三、辞書

- [1] 柳田国男. 民俗学辞典. 東京：東京堂, 1951.

四、サイト

- [1] 怪異・妖怪伝承データベース：<http://www.nichibun.ac.jp/>